

Preface

本学会の使命は、歯科医療と抗加齢・健康増進との橋渡し 武内博朗

Trends

特別企画1	アンチエイジングアワード2016授賞式 インタビュー：アンチエイジングアワード2016受賞記念	1
	さだまさし 松尾 通 中原悦夫	2
特別企画2	対談：オペラ作品における表現の限界と美意識	8
	三枝成彰 林 真理子 中原悦夫	

Original Articles

原著1	上顎の重度歯周病患者に対して審美機能の回復を考慮し 抜歯即時埋入・即時荷重(ワンデイインプラント®)を行った症例の検討 —10年経過症例における長期予後—	16
	中平 宏 丸尾勝一郎 西原正弘 山下正晃 木本克彦 朝波惣一郎	
原著2	計測方法が違うCAD/CAM システムで製作した ジルコニアクラウンの適合精度に対する評価	23
	油井知雄 仲西康裕 廣瀬由紀人 越智守生 斎藤隆史	

Review Articles

総説1	日本のソフトパワーとしての食の力： 「食」と「農」をつなぐジャパン・オリジナルの料理の基準を作る、 ソーシャル・アントレプレナーとしての料理人	29
	高橋喜幸	
総説2	歯科医療機関における法務的視点	34
	小畑 真	
総説3	歯学部での大学教育の在り方と現在の歯科医師国家試験	38
	岡田優一郎	
総説4	歯科口腔領域からみる認知症	44
	眞鍋雄太	
総説5	アンチエイジング歯科のための小白歯・智歯便宜抜歯の凍結 —低温生物学—	51
	河田俊嗣 加来真人	
総説6	口元のトータルビューティに関する研究 —リップマッサージ—	60
	松尾涼子 水木ゆき菜 眞鍋厚史	
総説7	高齢者にみられる顎関節症と鑑別を要する疾患	65
	土肥雅彦 本間義郎	

Trend

特別企画3	鼎談：糖尿病、口腔感染症における医科歯科連携 ～内科医の視点でみる口腔領域、そして歯科と健康増進との接点を考える～	69
	西田 互 武内博朗 中原悦夫	

Coffee Break

コーヒーブレイク	“麗人と共に避けたり 巴里の雨”	78
	中山 純	

Suggestions & Reports

提言・報告1	デンチャー部会：義歯とアンチエイジング —私のパーシャルデンチャー患者体験記 その2—	79
	村岡秀明	
提言・報告2	デンチャー部会：こだわりのある患者さんの想いを義歯にする	84
	峰岸真沙彦	
提言・報告3	矯正歯科部会：マウスピース型矯正歯科装置の功罪 —インビザライン矯正歯科治療を考察する—	87
	坂本紗有見	

提言・報告4	咬合・咀嚼部会：ヒューマンブリッジの臨床	93
	前島健吾	
提言・報告5	アロマ・サプリメント部会：認知症・生活習慣病とフィットセラピー (メディカルアロマ・メディカルハーブ)	98
	大工原 忍	
提言・報告6	スポーツ・健康部会：ラグビーでのコンタクト時における マウスガード装着時のクレンチングが及ぼす影響	103
	長谷川 聖 長谷川 賢	
提言・報告7	ライフスタイル部会：唾液とライフスタイルの関連性	107
	前島美佳	
提言・報告8	歯科衛生士部会：地域包括ケアを目指した歯科医院づくり —かかりつけ歯科衛生士として必要なこと—	111
	横井節子	

Case Report

ケースレポート	フード部会：健康志向が高まると酸蝕症(Tooth wear)が増える?	116
	山本典子	

Report

報告	デンチャー部会：“噛めるか義歯組” —デンチャー部会主催スペシャルセミナーを開催して—	121
	川島 哲	

Product Presentation

製品紹介	器材・薬剤部会：歯周ポケット内を可視化し、診査・診断、 歯周治療を可能にした歯科用内視鏡	123
	佐野修司	

Proceedings

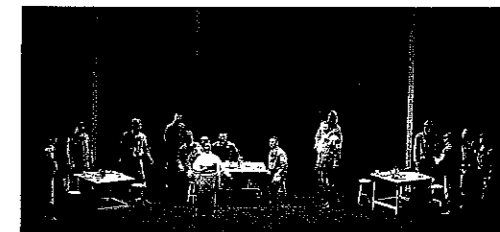
講演論文1	加齢と口腔マイクロバイオームの変化	126
	山下喜久	
講演論文2	予防歯科の新しいパラダイム —生活習慣病(NCDs)を予防するための歯科外来のすすめ—	132
	武内博朗	

図書紹介	全ての病気は「口の中」から！ 歯が痛くなる前に絶対読む本 世界の美女だけが知っている本物の綺麗を手に入れる方法 Secrets from Miss International ~finding your own beauty~	140 141
------	---	------------

第11回学術大会を終えて	荒木房枝	144
第12回学術大会にむけて	阿部馨三	150

●案内

認定医取得者一覧	152
会則	153
認定医制度規則・施行細則	155
認定歯科衛生士制度規則・施行細則	160
サプリメントアドバイザー規則・資格制度施行細則	163
ビューティアドバイザー規則・資格制度施行細則	164
メディカルアロマコーディネーター規則・資格制度施行細則	165
バクテリア・セラピスト認定制度規則・施行細則	166
ホワイトニングエキスパート規則・資格制度施行細則	167
顧問	168
編集委員会から投稿のお願い	武内博朗 169
投稿規程	171
編集後記	石田恵子 172
投稿票	



三枝成彰：オペラ「KAMIKAZE—神風—」©山本倫子  
2013年1月、2月 東京文化会館

# 歯学部の大学教育の在り方と現在の歯科医師国家試験

東京デンタルスクール 塾長・歯科医師  
岡田優一郎

## 1 緒言

「歯科医師国家試験が難関化し、歯科業界が大きな変革の時に来ている」という声をさまざまな場所で聞く。歯科医師国家試験の合格率は、ここ数年低下が顕著となっており、歯学部教育においても国家試験に合わせた変化が急務となりつつある。本稿では、現在の歯科医師国家試験と歯学部教育の在り方について述べたい。

## 2 合格率の推移

近年、歯科医師国家試験の合格率は急激に低下している。2008(平成20)年に行われた第101回の歯科医師国家試験の合格率は72.1%(全体)であり、2013(平成25)年の106回までほぼ横ばいであった(71.2%)<sup>1)</sup>。しかし、107回歯科医師国家試験合格率では3,200名中2,025名合格の63.3%となり、以降この水準で推移を続け、109回2016(平成28)年には合格者が2,000名を遂に割り込み、この事実は、大学や予備校業界で大きな注目を浴びることとなった。2003(平成15)年に行われた第96回歯科医師国家試験の合格率は91.4%であり、受験者3,208名に対し2,932名の合格であった。109回歯科医師国家試験

回数	受験者数(人)	合格者数(人)	合格率(%)
第100回	3,200	2,873	89.8
第101回	3,295	2,375	72.1
第102回	3,531	2,383	67.5
第103回	3,485	2,408	69.1
第104回	3,378	2,400	71.0
第105回	3,328	2,364	71.1
第106回	3,321	2,366	71.2
第107回	3,200	2,025	63.3
第108回	3,138	2,003	63.8
第109回	3,103	1,973	63.6

図1 第100~109回歯科医師国家試験の合格率の推移  
(文献1を改変)

は受験者3,103名に対して1,973名の合格で合格率63.6%と約10年で大きな合格率の差となっている(図1)。

いわゆる一昔前の資格試験といわれていた時代はすでに過去の話と呼べる数値である。

## 3 現在の歯科医師国家試験の傾向

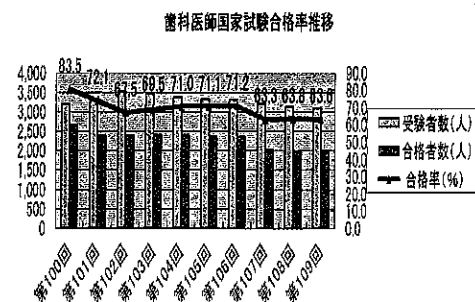
現在の歯科医師国家試験では、年々、さまざまな試験分野の追加や採点方法の見直しなど大きく変化を遂げている。ここでは現在の歯科医師国家試験の傾向をご紹介します。

### ・英語の出題

現在の歯科医師国家試験では、英語による問題の導入が進められている(図2)。昨今では、単に医学英語を暗記するだけでは、解答を導くことが困難な問題も出題される。そのため、歯科医師国家試験において本問を得点源とするには、診療に必要な医学英語の単語だけでなく、一般の英文法の読解力も求められる。

### ・医学的知識への拡充

近年の歯科医師国家試験では、医学分野への拡充が行



C-1  
The goal of ( ) is to explain the physical and chemical factors that are responsible for the origin, development, and progression of life.  
( )に入るのはどれか。1つ選べ。  
a pedodontics  
b periodontology  
c physiology  
d prosthodontics  
e psychology  
解答:c

図2 第108回歯科医師国家試験に出題された問題

A-71  
注意欠陥多動性障害の児童に対する歯科治療時の対応で適切なのはどれか。すべて選べ。  
a 具体的に指示する。  
b Bobath体位で行う。  
c 行動調整法を用いる。  
d 説明に幼児語を用いる。  
e スモールステップで行う。  
解答:a, c, e

図3 第109回歯科医師国家試験に出題された問題

われている。医師国家試験で過去に出題された内容や臨床検査、看護師国家試験など垣根を越えた問題の出題がみられる。さまざまな全身疾患を持った患者は、歯科医院への来院の可能性が常に存在しているものの、今までは歯科的な対応のみを覚えていれば解答が可能という問題が多くみられた。しかし、たとえば特定の疾患に対してはこのように対応をする、という単純な対応から、全身状態や精神状態などその全身疾患への理解を深めたうえで、患者の心情や対応の背景を問う問題が出題されている(図3)。最新版の出題基準である平成26年版歯科医師国家試験出題基準(第107回歯科医師国家試験より適用)では「歯科医師として必要な、高齢者や全身疾患を持つ者等への対応」のさらなる充実について言及している<sup>2)</sup>。

### ・法医学・災害時の歯科保健対策

近年変化した歯科医師国家試験のテーマの一つが、法医学・法歯学の導入である(図4)。法医学の授業は以前より行われていたが、平成26年版歯科医師国家試験出題基準において歯科医師国家試験への導入が決定し<sup>2)</sup>、各大学では、国家試験を意識した授業へのシフトが求められる。法医学・法歯学教室については、設置されている大学と設置のない大学が混在する。国家試験への法医学・法歯学の導入に伴い、教室の設置についても、今後議論する余地があると考えられる。

また、法医学という学問は裁判や医療事故などを扱う内容と死体現象や毒物など一般的にイメージされる内容を有する。大学によって、過去の医療事故のケース紹介などに比重を置いた講義を行っている大学と、死体現象や血痕検査などに比重を置いた講義を行っている大学が存在し、この点も今後カリキュラムへの影響が出ると考

C-39  
死後硬直により最初に可動性が抑制される関節はどれか。1つ選べ。  
a 頸  
b 肩  
c 肘  
d 股  
e 膝  
解答:a

図4 第109回歯科医師国家試験に出題された問題

えられる。また、災害時における歯科保健対策も、今後より一層の出題が想定される。重症度を判定するトリージなどについても、今後はさらなる内容の学習も進めてゆく必要がある。

### ・出題形式の変化

歯科医師国家試験では内容だけでなく、出題形式の変化もみられる。

出題形式の変化により、「選択肢を消去していたら残った」「なんとなく」といった暗記や知識が不十分なまま試験に臨む受験生の合格が難しくなった。とりわけ、卒業試験などで受験生より「難しい」という声が届くものが、スーパーXと呼ばれている問題形式である。

①スーパーX:5つの選択肢のうち、正解となる選択肢をすべて選ぶもの。(正解は1~5個)

第103回歯科医師国家試験より採用。

スーパーXと呼ばれる問題形式は、歯科医師として十分な学習が必要な内容を扱う際の出題形式として導入が行われた。しかしながら、近年の問題として、各大学のスーパーXの頻用が挙げられる。各大学では、現役生の実力向上のため、定期試験や卒業試験に本形式の問題を多用しているが、そのうちの選択肢の一つが非常に難しいという問題をしばしば見かける。たとえば、法律が過去に何回改正されたか、という選択肢などである。これらは他の大学の成績優秀者でも解くことはできず、本当に必要な知識であるかどうかは疑問が残る。この出題形式は実力の定着を問う意味で、非常に有用な出題方法であるが、出題者は5つの選択肢を、暗記すべき内容に限定して出題を行う必要があると考える。

②多肢選択肢問題:6つ以上の選択肢より正解を選ばせるもの。

第105回歯科医師国家試験より採用。

多肢選択肢問題は選択肢が多肢にわたるため、正しい知識を修得していなければ解答にたどり着くことは難しい。それゆえ、「なんとなく」で解答をする受験生が存在する、という問題点を解決するために有用な出題形式である。今後、どのように生徒の合格率などに影響を及ぼすことがあるか、注目を浴びている出題形式である。

③計算問題:選択肢ではなく、計算した解答をそのままマークシートに書き込むもの。

B-34  
32歳の女性。右側下唇の麻痺を主訴として来院した。2週前に下顎右側第一大臼歯を下顎孔伝達麻酔下に抜去してから発現したという。治療中の写真を別に示す。この治療法に伴う生理学的変化はどれか。2つ選べ。

a 散瞳  
b 血流量の増加  
c 皮膚温の上昇  
d 発汗量の増加  
e 鼻腔通気量の増加

解答：b, c

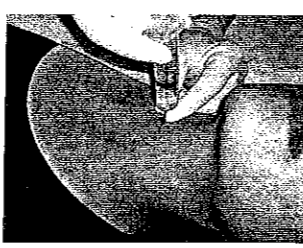


図5 第107回歯科医師国家試験に出題された問題

第105回歯科医師国家試験より採用。

計算問題はフッ素中毒量など、歯科医師国家試験のなかでは、一部の内容に限られる出題形式であった。しかしながら近年では、計算問題は、多くの問題や過去に出題された内容をさらに改変して出題するなど、さまざまな問題の制作がみられている。この計算問題の導入によって歯科医師国家試験はさらに「深みのある国家試験」と呼べるようになる、と考えられる。

しかし、この出題方式に問題点が存在しないわけではない。

たとえば、大学での授業内容である、問題の内容を受験生は試験本番で、初めて目にするようになる。その際に、計算問題の内容を授業中に扱っている大学とそうでない大学では正答率に大きな格差が生まれ、その結果、問題自体が不適切問題(採点除外)になりやすい可能性がある。そのため、各大学では出題が想定される内容をしっかりと教えてゆく必要があると考えられる。

#### ④臨床術式を問う問題の増加

臨床実地問題の位置付けは、「参加型の臨床実習で得た能力をより適切に評価できる問題を出題すべき」とされている<sup>2)</sup>。そのため、臨床実地問題においても、かつては診断のみであったものが、その治療法を問うもの・術中の写真より必要な器具・次に行う事項を問う問題・正しい順序への並び替え、へとシフトしつつある。また、過去に出題された内容について、さらに掘り下げた出題も多くみられる。たとえば、実際に出題された問題を下記に示す。顔面神経麻痺などに対して用いられる星状神経節ブロックについて、かつては「顔面神経麻痺の治療といえば星状神経節ブロック」と単純な暗記によって問題を解くことが可能であったが、近年では、その作用機序や臨床上の手技、患者さんの変化などを問う問題が増加している(図5)。

#### ・合格基準の増加

従前、歯科医師国家試験は「一定の基準点以上を満たせば合格」という絶対評価方式であった。しかしながら、第91回歯科医師国家試験より、出題基準で定める内容が近接した領域を設け、それぞれに基準点を設ける、実

質的な相対評価方式となっている<sup>3)</sup>。つまり、毎年基準点が変わるのである(以下、領域別得点率とする)。第95回歯科医師国家試験より導入された必修問題も99回より50問、103回より70問となり、問題そのものも上記の内容を受け、難化傾向にある。なお、必修問題は「8割以上の正答率を満たすこと」という絶対評価となっている<sup>3)</sup>。

さらに、平成26年版歯科医師国家試験出題基準で必要最低点という新たな合格基準が設けられた。これらの合格基準をすべて満たすことが現在の国家試験の基準となる<sup>3)</sup>。

これらのなかで、受験生が特に苦手意識を持つ領域が「必修」である。必修問題は8割以上の正答をもって合格することができる。この必修問題では、基本的な内容の問題が出題されるが、先述の英語問題や医学領域への拡充した知識が必要な問題も出題されている。そのため、たとえば、医師や臨床検査技師にとっては「必修」である問題であっても、歯学部領域では学校によっては講義が十分に行われていない、と推測される内容が出題されていると感じる受験生も多い。この必修問題の出来が歯科医師国家試験合格の一つの鍵となることが、学生の意見と同様に重なる部分である。

医学領域への知識の拡充は、高齢化社会や歯科医師に求められる知識・スキルの向上を考えると、今後ますますその問題数は増加し、より幅広い知識が求められるようになるであろう。これは歯科医師がいわゆる「歯」を診るだけでなく、舌や口腔全体の解剖生理学、嚥下運動、全身管理として診療を行う責任ある立場である、という意思表示とも感じる。医学分野への拡充は、もはや止めるべきではなく、医学分野における重要事項は、大学教育のなかで取り入れてゆくことであると考えられる。

## 4 歯科医師国家試験と歯学部教育

歯科医師国家試験合格者の低下を受け、大学側においても、低学年からの進級や卒業試験の難化傾向が著しい。たとえば、全科にわたる総合(進級)試験の導入や合格点の引き上げ、試験回数の増加、卒業基準の厳格化

表1 私立大学における第109回歯科医師国家試験の出願者数・受験者数・合格者数(新卒)

	出願者数	受験者数	合格者数
東京歯科大学	147	127	120
昭和大学	100	97	77
日本大学	130	113	85
日本歯科大学	130	96	81
愛知学院大学	143	112	85
日本歯科大学新潟	59	47	35
大阪歯科大学	106	73	57
神奈川歯科大学	127	67	55
日本大学松戸歯学部	109	73	43
福岡歯科大学	100	85	38
松本歯科大学	81	37	30
朝日大学	132	77	46
岩手医科大学	83	48	26
北海道医療大学	81	61	25
明海大学	145	81	44
奥羽大学	71	49	21
調見大学	145	98	39

が挙げられる。歯学部のなかには、国家試験の受験者数が出願者数の半分以下の大学や、国家試験は受けさせないが、卒業だけを認める三次試験を行った大学もみられる。大学によっては、その年の国家試験出願者数のうち、国家試験合格まで至ることができるのは、10~20%という大学も存在する(表1)。

あくまで、上記の表における合格率は、受験者数に対する合格率であるため、出願者数に対する合格率でみると、その数値はさらに低下する<sup>4,5)</sup>。(歯科医師国家試験の出願自体は卒業試験前の11月頃に行われている)

#### ・現在の歯学部の入学と定員割れ

歯科医師の国家試験の合格率とともに、注目される事項の一つが歯学部の定員割れである<sup>6,7)</sup>。

歯学部といえば、医学部・歯学部・薬学部と理系大学では憧れの学部であり、厳しい社会情勢からみたこの事実は、現在も大きく変わらないだろう。しかしながら、「コンビニより多い歯科医院」というフレーズに題するように、世間一般では、歯科医師の過剰が叫ばれている。実際に、歯科医師が過剰であるかという点は今回のテーマではないため触れないが、このフレーズに代表されるイメージが、歯学部の人気低下の一つの要因となったことは事実であろう。まさに、歯学部全入時代と呼ばれた時代に入学した学生について、次は考察を行いたい。

#### ・歯学部全入時代の学生

歯学部のイメージ低下が大きな一つの要因と考えられる。過去の歯学部全入時代、この学生たちには、どのような特徴があるのだろうか。歯学部の教員から聞こえてくる言葉は「歯科医師への憧れが少ない」「目的意識がない」「学習意欲が少ない」というような声である。実際に低学年からの授業を行っている立場として上記のような

点は大学の教員が感じる意識と大きく差はなく、歯科医師への憧れが少ない、という点はその大きな一つである。

#### ・歯科医師への憧れ

医師・歯科医師・薬剤師は、医療の現場に欠くことのできない大きな責任と使命を有している。歯学部入学の動機はさまざまであり、純粋に「歯科医師を目指したい」という学生や、「両親の意思を継ぐ(歯科医院継承)」という意見だけでなく、実際の現場では「医学部に入れなかった」という動機もみられるだろう。いわゆる定員割れと呼ばれた、わずかに数年前には歯学部の人気のみであった時代がある。社会が抱いていた華やかな歯科医師のイメージである。その頃には、歯科医師を目指したい、という情熱あふれる学生が多数入学していた。同様に、医学部に入ることができなかった、という動機の学生もいたが、これらの学生に共通していたことは、歯学部入試の高い倍率を突破した現在よりも、高い偏差値を有していたという点である。また、医学部に合格をしていたが、医学部のなかでも偏差値の低い大学の合格の場合、偏差値トップの歯学部に入ろう、という学生もみられた。これらの学生は、倍率が高いなか突破したという自信を持ち、勉強するというを実際に行ってきた学生が入学をしていた。

しかし、歯学部全入時代と呼ばれる学生は「歯学部簡単に入れる」という理由で入学をした者も多くみられる。この時代の学生が、歯学部教員の抱く現在の学生像である。

#### ・歯学部の学生の真実の姿

歯学部全入時代と呼ばれた学生たちが、現在の歯学部在籍している。これらの学生の現役生を塾という立場で多数みてきたなかで、ある姿が浮かび上がってくる。それは歯科医師という姿を目指す学生の葛藤である。歯学部の受験倍率が高い時代に歯学部受験を行った学生たちは少なからず歯科医師という姿に憧れを持っていることが多い。私自身も例外ではなく、骨や歯の解剖学に多くの興味を抱き、高校生の頃より出身校である日本大学松戸歯学部の当時の組織学教授であった小澤幸重先生の恐竜や動物の歯の化石を研究する姿に感銘を受け、歯学部の入学を決意し、入学後、日本解剖学会の学生セッションでポスター発表の機会をいただき感動した経験を今でも鮮明に覚えている<sup>8)</sup>。しかし、現在の学生は歯学部への憧れを持つ者が少ないといわれている。これは塾という教育現場にいても感じることであり、しかしながら、これが現在の本当の学生の姿なのかということに違和感を覚え、教育に携わっていた。そして、現在の歯学

部の教育に必要なことを近年体感している。

#### ・歯科医師という仕事

歯学部の現在の教育現場のなかで、学生の目的意識やレベルの低さがしばしば注目を浴びているが、歯学部の現役生の指導という立場で教育に携わり、劇的に学力レベルが向上する学生を多数目の当たりにすることがある。歯学部の教育に今最も必要なことの一つは何か。この答えが少しずつ見えてきた。それが「歯科医師への憧れ」である。

「歯科医師は、歯科医療及び保健指導を掌ることによって、公衆衛生の向上及び増進に寄与し、もつて国民の健康な生活を確保するものとする。」(歯科医師法第1条)と述べられているとおり、歯科医療および保健指導のプロを目指し、切磋琢磨する姿が歯科医師である。大きく分けて歯科医師は全身疾患の知識に加え、治療手技の大きな2つの「柱」を登ってゆく必要がある。幅広い医学・歯学知識に加え、治療手技に至るとなるとこれほど終わりの見えない膨大な高みを目指せる仕事はほとんどない。加えて、日々の診療においても、知識・技術・人格のすべてが問われ、患者から日々評価が下される厳しい仕事でもある。つまり、患者、そして「自分自身」が常に日々の診療を「見ている」のである。知識をアップデートし、技術の研鑽を積み、人格を含め自分自身を顧みる。すると、その結果が自分に返ってくる。つまり、「実力重視」の厳しい業界である。このような先の見えないなかでも、同じ歯科医師として常に自分よりも上がいる。そして、それを努力により向上できるという仕事はそれほど多くない。このような情熱を学生に伝えることによって、学生の目に何か「炎」のような情熱が瞬間的につく姿を見ることがある。歯科医師に対する憧れだけが情熱を灯すことができるのである。

#### ・現在の歯学部教育

現在の歯学部教育では、2つの大きな問題に直面している。大学のカリキュラム・授業の独創性と難関化する歯科医師国家試験への対策である。歯学部入学の目的は歯科医師となることである。この点に対しては、ほとんどの学生・保護者の共感を得られるだろう。しかしながら難関化する現在の歯科医師国家試験では単純な問題ではない。現在の難易度の歯科医師国家試験、低学年からの留年が増加<sup>5)</sup>する、歯学部のカリキュラムを突破するためには、低学年からの十分な学習と情熱が必要だからである。この2点なくして歯学部卒業や現在の歯科医師国家試験を突破することは、非常に困難である。難しい点は、歯学部での教育において、歯科医師国家試験対策のみを行えばよいのか、という点である。これは非常に

難しい問題であるが、歯科医師国家試験対策のみを行った教育では、歯科医師としての人間としての深みや深い知識、大学の目的とする本来の「大いに学ぶ」という本来の目的を忘れることに他ならないという点も事実である。大学独自の教育をなくすことは、大学教育という本来の目的を忘れてしまう危険性があり、国家試験合格のための教育が、社会から歯科医師という立場としての尊敬や信頼、歯科医師としての誇りを持つことができるかということ、それは難しいといわざるをえない。しかしながら、難関化する歯科医師国家試験に対応することも、歯学部教育にとって目を背けることができない真実である。そのため、大学教育ではこの一見、2つの相対するようにみえる内容をともに満たす教育の比重や講義のカリキュラムを再度考えてゆく必要がある。難関化する国家試験は歯科医師だけではない。薬剤師国家試験においても、同様の国家試験の難関化が起こっている。薬学部では予備校や各種団体と協力・協議し教育にあたるシステムが進められている。本来、歯学部教育の延長にあることが、歯科医師国家試験の理想の姿である。最後にこれからの歯学部教育・歯科医師国家試験の姿を考察してゆきたい。

### 5 これからの歯学部教育・歯科医師国家試験の姿

歯学部教育は大きな変革の時期に入っている。難関化する歯科医師国家試験、入学者の学力の低下、低学年からの留年や卒業試験の難関化、CBT (Computed based testing) 基準引上げ、歯学部教育の在り方である。歯科医師国家試験は合格率の低下だけでなく、歯学部低学年の留年<sup>9,10)</sup>や卒業試験の留年<sup>5)</sup>、指導経験からみる問題の難易度などを加味すると、歯科医師国家試験を突破するということは確実に難関化している。これらの問題を解決するために、まず大切なことは、歯科医師が理想の仕事として社会で受け入れられることである。綺麗ごとのように聞こえるが、必ずこの問題に直面することになる。この歯科医師としての憧れが、希望を持った若い学生を集めるという結果につながる。この役割を歯学部すべてに一任することは非常に厳しいといわざるをえない。社会的な法整備や改善を官民ともに行う必要がある。また、歯学部では常に教育・指導方法について大学・そして教員に至るまで日々考え抜き、学生のために尽力しなければならない。そして、学生が大学で「大いに学び」人間的に成長できるよう魅力ある大学にする必要がある。まさに学習だけでなく、大学生活を謳歌できるように教育システムを目指さなければならないと感じる。そして、世界からみても魅力的な情熱を持った歯科医師が、日本に誕生してゆくことを期待してやまない。

#### 文献

- 厚生労働省：歯科医師国家試験の現況。p.11, 2015. <http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10803000-Iseikyoku-Ijika/0000102032.pdf>
- 厚生労働省：平成26年度歯科医師国家試験出題基準。http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou\_iryuu/iryuu/topics/dl/tp130329-01\_01.pdf
- 厚生労働省：歯科医師国家試験の現況。p.8, 2015. <http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10803000-Iseikyoku-Ijika/0000102032.pdf>
- 文部科学省：最低修業年限での歯科医師国家試験合格率(平成27年度)
- 文部科学省：歯学部歯学科卒業生について

- 文部科学省：平成27年度歯学部歯学科入試結果
- 文部科学省：平成22年度歯学部歯学科入試結果
- 4~7) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/035/gijiroku/\\_icsFiles/afeldfile/2010/10/18/1297944\\_5.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/035/gijiroku/_icsFiles/afeldfile/2010/10/18/1297944_5.pdf)
- 岡田優一郎, 鈴木久仁博, 山本 仁, 小澤幸重: メリテリウム (Moeritherium) 白歯の組織構造(会議録), 解剖学雑誌(0022-7722), 81 (Suppl.): 154, 2006.
- 文部科学省：平成26年度における歯学部(歯学科)留年者・休学者の割合
- 文部科学省：歯学部歯学科の平成21年度における留年者等について
- 9~10) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/035/gijiroku/\\_icsFiles/afeldfile/2010/10/18/1297944\\_5.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/035/gijiroku/_icsFiles/afeldfile/2010/10/18/1297944_5.pdf)